

震災時の弔い 葬儀社が語る

仙台周辺の葬儀業者が集まった団体が17日、「災害時の『弔い』の尊厳を如何いかに保つか」と題したフォーラムを開いた。

菅原裕典・清月記社長が震災後の葬儀業者の活動について講演。震災翌日の3

月12日朝、仙台市から「棺をどれくらい用意できるか」と依頼され、1千人分を用意したことや、火葬が間に合わないため遺体の仮埋葬を引き受け、その後、本葬のために掘り起こす作業まで、従業員が精神的に厳しい仕事に当たっていたことを、生々しく語った。

「何が起きているのかと思いつながら、ご遺体をきちんと送り出したい、という思いに突き動かされていて。我々がご遺体の尊厳を大切にしようとしたのは、そのまま葬儀社としての誇りを確かめようとしたのかもしれない」と、菅原さんは締めくくった。